

議員研修誌

地方議会人

2019
12
December

共同編集：全国市議会議長会・全国町村議会議長会

巻頭言 宮島 喬

■特集

▶ 新たな外国人材の受入れと課題について
／平原長英

▶ 持続可能な地域に向けた外国人住民施策について
／高坂晶子

▶ 外国にルーツを持つ子どもたちの教育課題
／佐伯康考

■ 現地報告 滋賀県草津市／北海道二セコ町／香川県まんのう町

特集

外国人との新しい社会を創る

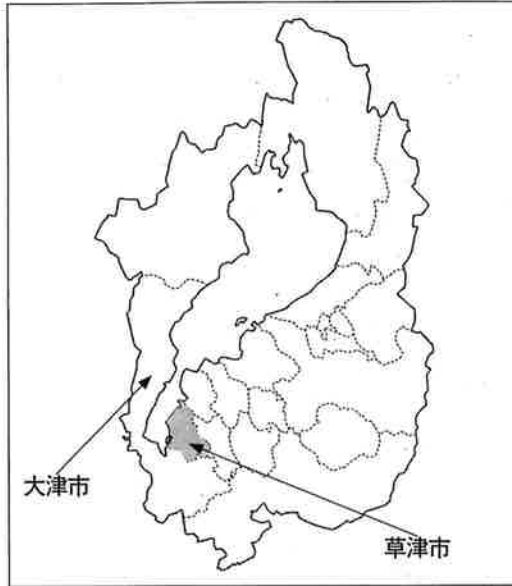


自治体と協働して 外国人の活躍の場を —支えられる側から支える側へ—



草津市国際交流協会
副会長

なかにし
中西 まり子



◆ はじめに

草津市は滋賀県の南東部に位置しており、JRで京都まで約20分、大阪まで約50分と利便性の高い市。総人口・13万4689人（2019年10月現在）で今なお人口が増加している比較的若い世代の多い市です。

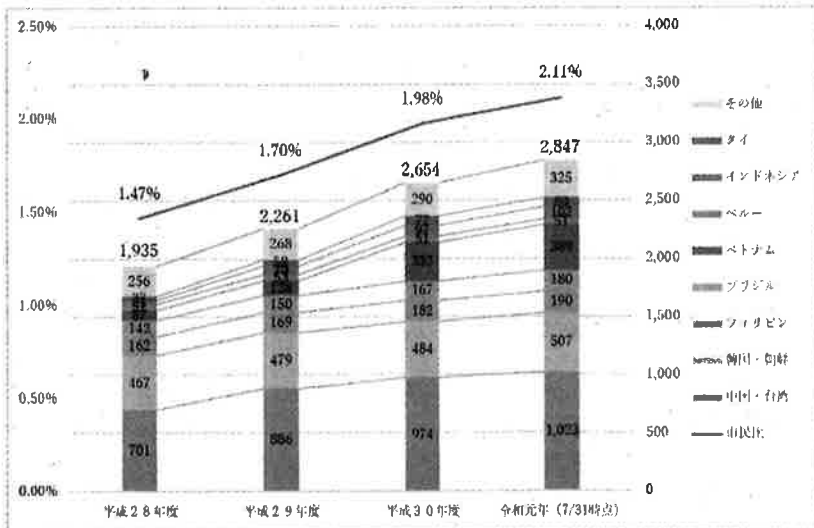


図1 草津市の近年の外国人住民の動向

草津市では現在2870人（2019年9月現在）の外国人が暮らしており、市内の人口の2・13%を占めるなど年々増加しています（図1）。市内に立命館大学が立地し、多くの留学生、研究員やその家族が在住しており、留学生率が約30%と非常に高いのが特徴です。さらにパナソニック、ダイキンなど大きな工場があり、研修生なども多いです。

英語は堪能な人が多いですが日本語能力は低いため、地域の情報が届きにくいなど生活の不便さを感じています。また地域との接点が少なくて、いざとなったら災害弱者になるという課題があります。そこで草津市国際交流協会（以降KIFAと記す）が市内在住の外国人との新しい社会を創るために、「自治体と連携して外国人も一市民としての活躍の場を」をコンセプトに活動に取り組んできました。その中でも今回次の3点をとりあげます。

- ◎「日本初の外国人機能別消防団員の発足」
 - ◎「地域住民と支え合うベトナムコミュニティ」
 - ◎「文化庁事業で議員参加により発展したやさしい日本語サロンの開設」
- それぞれの活動は草津市の担当課との協働で達成されてき

ました。

◆ 日本初の外国人機能別消防団員の発足

(草津市の課題)

- ・防災訓練時に、地域に住む外国人の参加がない
- ・参加する側の外国人は「何をやるのがわからない」
- ・受け入れる日本人側は外国人が来てもコミュニケーションが取れない

(草津市消防団が抱える課題)

- ・団員数の不足
- ・増加する外国人住民に対応できるスキル不足

2013年に、草津市は多言語(5か国語)の防災ガイドブックを作成しました。しかしどこに届けたらいいかわからない。危機管理課から相談を受けたKIFAは、それなら日本語教室の外国人生徒たちにそのハンドブックを使って防災の学習をしてもらいましょうということになりました。ところが、指導に来てくれた危機管理課の職員たちは驚き、愕然としました。なぜなら、日本人と違い、かれらには全く防災の知識も訓練経験もないという事実を目の

当たりにしたからでした。

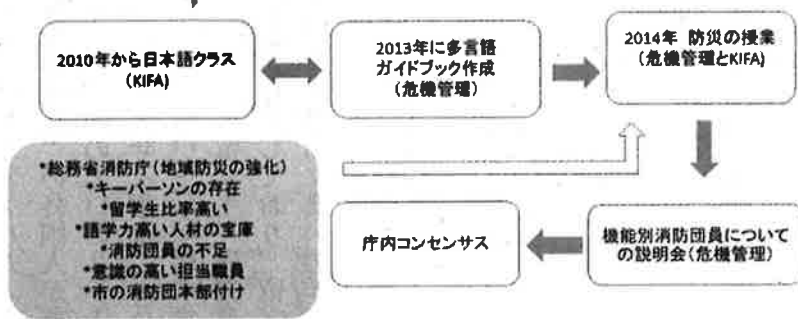
災害発生時には彼らも日本人同様に避難所へ避難することになります。言葉が通じないので安全な避難および避難所生活での情報収集やコミュニケーションが困難です。

また生活習慣も文化も違うことから不安な避難所生活の状況になるでしょう。日本人たちもまた彼らの生活文化を理解していかないでトラブルも予想されます。

そこで考えたのが、日本語が堪能な留学生たちがきつといるはず。彼らに支援する側にまわってもらえることができるのではないだろうか、と。

通常の消防団員は非常勤の特別地方公務員であり、一定の公権力行使の権限が与えられているのですが、外国人には制度の壁があり、通常の消防団員としての活動はできません。そこで能力や事情に応じて特定の活動にのみ参加する機能別消防団員の制度があることに着目し、草津市は2015年日本初の「外国人による機能別消防団員」を発足させることができました。これを思いついたのは1人の消防署出身の職員でした。

図2 機能別消防団員誕生への道のり



任命を受けた団員たちは、消防署での基礎訓練として「礼式訓練」「普通救命講習」「座学」「基礎実務訓練」を受け、活動を開始しました。

卒業、就職等で当初のメンバーとの入れ替わりはありますが、現在市内の在住外国人数の上位4か国(中国、韓国・朝鮮、ベトナム、フィリピン)9名のメンバーがいます。現在は留学生以外の在住外国人、例えば配偶者が日本人という外国人もメンバーになっています。

この仕組みと活動は消防署と草津市危機管理課との連携の上に成り立っています。

彼らはこのような活動をするにより、防災知識

設立当初任命された団員の中心となったのがKIFAの日本語教室「きずな」で学ぶ留学生達でした。母国語と日本語が堪能で日本の生活習慣や文化にも理解が深いモチベーション高く使命感のある人たちでした。

機能別消防団員の活動としては、

平 時…外国人への防災啓発活動や各種イベント等でのPR活

動、自治体・KIFAが主催するイベントでの外国人との橋渡し役。

災害時…外国人に対する安全な避難誘導、避難所における支援(通訳・翻訳・生活相談等)

それ以外に他の団員と同じように草津市の防災訓練、消防団の初め式などにも参加しています。

発足当初は珍しいということもありメディアが押し寄せました。現在は落ち着いております。

写真2 議会だよりにも案内されました



の向上や消防団員としての使命感と誇りが持てただけでなく他の留学生や在住の外国人たちの安心感や防災に対する心構えも出来てきました。

まだ市民への認知等の課題もあ



写真1 外国人機能別消防団員 任命式

りますが、一過性の組織に終わることなく、組織としての継続性を保つためにもKIFA、消防署、大学、危機管理課との連携を密にしてお互い協力のもと、新人団員の確保に努め、市民への認知、啓発活動を持続していくべきであると考えています。

◆ 地域住民と支え合うベトナムコミュニティニテイー

草津市には「在滋賀ベトナム青年会」という組織があり、KIFAと共に「ベトナムDAY」という国際交流イベントなどを開催していました。そのリーダーであったベトナム人女性 Dhuong さんは自分の住んでいる草津市玉川学区野路町で、地元の方と時々挨拶をかわすようになり、親しくなっていきました。そして畑を借りるようになったのをきっかけに、地域住

民との交流が始まりました。地元の方たちもだんだんとベトナム人の勤勉さ、誠実さがわかり、自治会として地域住民とベトナム文化を知るイベントが開催できないかという話が持ち上がりました。そこで自治会活動を所管する草津市まちづくり協働課の協力も得て、玉川学区まちづくり協議会と共催する「感じて、ふれて、ベトナム！」を玉川学区自治会所有の野路町新宮会館で開催することができたのです。

このイベントはベトナム人たちが、日ごろから地元のお年寄りにベトナムの食べ物や文化を知ってほしいと願っていたその思いが実を結んだのです。当日は地域の方を中心に170名もの参加者が集う盛大なイベントとなりました。これが功を奏してかその後、ベトナムコミュニティニテイーと地域の方々の結びつきはより強くなり、さまざまな形の交流が続いております。

毎年、地元の伝統的なお祭りでの神輿担ぎや、夏祭りの屋台のお手伝い、餅つきなど野路町自治会にとってはベトナム人会の若い力がなくてはならない存在となっております。



写真4 野路のお祭りでベトナム人たちが神輿担ぎに参加



写真3 感じて、触れて、ベトナム！

います。まさしく、地域の方との協働で

地域づくりの担い手として、外国人も活躍する場が来ています。さらに自治会の方々と一緒に「外国人コミュニティ」とつながる地域づくり」と題したセミナー形式のワークショップを自治会長もお呼びして行うことができました。まちづくり協議会という地域の住民自治組織と外国人コミュニティ主導での強いつながりの実践として、その模範例として私たちは「野路モデル」と呼んでいます。

文化庁事業で議員参加により発展したやさしい日本語サロンの開設

KIFAは外国人が誰でも自由に集い、語り、日本語を習得できるように居場所を作ることが必要と考え3年間文化庁より助成金を得て「生活者としての外国人のための日本語教育事業」を実施しました。私は文化庁日本語教育コーディネーターとして全ての事業にかかわっておりました。事業の2年目のテーマに選んだのが、「たぶんカフェ」の開催です。これは、多文化とカフェを掛け合わせたもので、外国人、行政、市民、

議員など立場をこえて外国人と共に新しい市のあり方や社会を創っていくために、お互いの課題や認識を確認するワークショップの場でした。

年度最後に、多文化共生フェスティバル【Worldたぶんカフェ・ファイナル】の開催を、多方面での多くの方々の参加を目標として設定しました。

議論を深めるためのプレ準備として、まずは、選定した3つのテーマ別のワークショップを事前に開催しました。

当時、市のシンクタンク機能としての草津市未来研究所がまちづくりや未来の草津を市民が自由に語りあう場として、南草津駅前に開設したアーバンデザインセンターびわこ・くさつ（以降UDCB Kと記す）が開設されたところでもあり、KIFAとの協働事業として『たぶんカフェ』を開催しました。

1回目：『外国人ママと日本人ママ』

2回目：『草津で働く外国人』

3回目：『留学生の地域貢献』

この3回シリーズのセミナーには、テーマに合った外国人や市民

だけではなく何人かの議員さんたちの参加もありました。

多文化共生社会を創るといっても一部の市民しか理解できていない、また市内には優秀な外国人の人材が住んでいるのに活かされていない、この課題の解決には、市民の代表であり、代弁者としての議員にも知っていただくことが近道だと気づきました。

これはKIFAでの3年間の文科庁事業の実行委員として草津市議会の議員さんが1名加わっておられ、この方からの提案でした。

議会に正式に声をかけるといえるのは、初めての経験で、思ったより苦労がありました。一人でも多くの議員さんにこの機会に参加してほしいとの強い意志で貫くことができ、草津市で多文化共生社会実現に向けてのアプローチとして、草津市議会議員24名全員に【Worldたぶんカフェ・ファイナル】におけるワークショップへの参加依頼を行うことができました。

その結果、当日は大雪だったにもかかわらず、市長はじめ議長を含む草津市議会議員16名、滋賀県議会議員1名、衆議院議員1名の

方が参加してくれ、テーマ毎のとても有意義なワークショップを行うことができました。外国人市民を含む多くの参加者が議員たちと自由に話し合う機会をもつことにより、お互いに新しい発見やたくさん新しいアイデアが得られたのでした。多文化共生社会を創るには、多文化共生の視点を持った人が増えることで自然とできていくのではないのでしょうか。

その時の話し合いの成果もあり現在、UDCBKで毎週火曜日の午前中（10：20～12：00）と月1回の金曜日の夕方（18：00～20：00）に「やさしい日本語サロン」を開催できるようになりました。



写真5 たぶんカフェ・ファイナルのようす



写真7 やさしい日本語サロンの案内チラシ



写真6 やさしい日本語サロンのワークショップと学習のようす



写真9 UDCBKでのやさしい日本語サロンのようす



写真8 やさしい日本語サロンで開催したマレーシア文化紹介

このサロンはいままで居場所のなかった外国人が気軽に日本人たちと出会い、地域の情報を得て活動に参加して、自分たちの居場所や地域での活躍の場を作るきっかけとなっていくきました。そのサロンでさまざまな国の方々が市民に自分の国や文化を紹介したりする異文化交流などの新しいイベントも開催できています。

◆ まとめ

KIFAでは外国人が地域の一員として日本人と同じように活躍の場を得るといふ観点から3つの事例を紹介してきましたが、それぞれの活動は行政(市役所)の各担当課(危機管理課、まちづくり協働課、草津未来研究所)との連携により進めてこられたのです。また地域の議員さんが耳を傾けてくれる効果も非常に大きいと感じています。今後も自治体と連携しながら外国人と共に新しい社会を創っていくように進めて参ります。

